

地図



317号

## 帰つて來た娘　—今年のお盆—

丸岡 稔

私が生まれ育つた家は、胎内市の名刹乙宝寺で有名な乙きのとという村にあり、今住んでいいる長岡市から一時間余りで行けるので、時々出かけて、家に風を通したり、庭の草とりをしています。

六人兄弟姉妹の末の妹が婿をもらつて跡を継いでくれたのですが、この十数年間に相ついで亡くなつてしましました。夫婦には子供が無く、縁あって近くの村で、妊娠中に離婚した人のお腹に入っている中にその子を養子として迎えることが決まつていきました。

産みの親はさぞかし複雑な辛い思いをされたと察しられます。その分、幸せに育てなければと妹夫婦は思っていました。妹は身体が丈夫な方ではなかつたのですが、自分も生まれてすぐ、結核の母親から離され、父方の伯母の家に里子に出された経緯もあり、それこそいのちがけで育てたと言つても過言ではありません。そんな妹の姿を見ていますので、私は度々訪ねていました。私には二人の娘が居ましたので、女の子であつたその子は姉のように慕つて育ちました。娘たちが両親のことを「パパ」「ママ」と呼んでいたので、その子も私達と同じように呼んでいて、私が行くと必ず「今日はパパと寝るの」と言つて一つふとんに寝るのでした。5才頃のある夏の日、胎内川の川口に連れて行って、水辺で遊んでいた時、突然大き

な波が川を逆上つて来て、あつという間にその子を巻きこんでしまいました。「パパ」と叫ぶ声が聞こえた時は、もう20mも岸から離れていました。心臓が凍る思いがしました。途端に又大きな波が後から来て猛烈な速さで、その子を岸辺に戻してくれ、私は必死につかまえて抱きしめました。帰の途に、「お父ちゃん達に話したら怒られるよね」と言うと、「パパ黙っていたら」と私を気遣つてくれました。「そういうわけにはいかないよ」と言つたのですが、帰宅してこの事を報告して詫びても、親達は目の前に元気にしている娘がいるので、「そうだつたの」と聞き流しただけでした。以来、私はこの子の生命を守つて行く責任があると思つていました。

平和な家庭の中で、素直に育つたのですが、小学校高学年になつた頃から様子が変つて来ました。いじめ、不登校という怖れていたことが起きました。惡意で言つたわけではないが、この子の生い立ちについての大人達の不用意な発言が、子供達のいじめにつながつて行くのは当然でした。この時から、親子の苦悩と苦汁が始まりました。「世間はむごいものだ」と思いました。事実は何れ話さなければならなかつたのですが、事が起きるまではどうするとも出来ないでいたのでした。中学は何か卒業し、県外の高校に入つたものの、すぐ自分で退学し、新潟市で一人ぐらしを始めました。これまで何度も家をとびだしていますが、母親にだけは、「お母ちゃんごめんなさい」と書置きを残して行きましたので、そういう気持があれば、きっと良くなるよと妹を慰めていました。

確かに何年か後に家に戻り、結婚もするのですが、この子が荒れ

ていた時の、父親の対応が、母親のようには行かず、こじれたままになつていました。

二人の孫が生まれ、「今が一番幸せ」と言つていた妹でしたが、病を得て間もなくこの世を去りました。母親の存在が、家庭の平和の要になつていたのですが、それが失われてしまい、やがて夫婦は離婚し、訪問介護を受ける身になつて、いた父親を残し、突然家を出て行つてしましました。私の留守中、家内に電話をよこしたのですが、説得には耳を貸さず、ただ「ごめんなさい」と言つただつたそうです。それから2年後、父親が亡くなつた時、友人が報せてくれて葬式に出ましたが、「お前を守つてやれなかつたら死んだお父ちゃんお母ちゃんに申しわけない。困つた時はいつでも言つてくれ」と言う私に、「これからは、どこに行つてもパパだけには報せることから」と、現住所と電話番号を書いてくれました。それから毎年、6月には粽と笹だんご、暮には越後の餅を送つてやり、その都度電話をくれ、子供達の様子も報せてくるようになりました。

数年後、再婚した報告があり、相手が子供達を可愛がつてくれて話すことでした。

昨年10月は父親の7年忌でしたが、「主人が一緒に出席しようと言つてくれたので」と電話がありました。故郷での法事の後、私と兄姉の家族と一緒に弥彦温泉に泊り、親しく話し合つて、いる中に彼の人柄に好感を持つことが出来ました。そして今年のお盆に、二人で泊まりがけでお墓参りに来ました。その晩、二人の結婚の経緯を交々話してくれました。息子が野球が好きで、地域の野球チームに

入って、そこで指導をしてくれていた彼に会ったこと。Kは野球のコーチよりも、息子が自分の思うことを人前で話せないことを何とか直してやりたいと思つたそうで、そしてそれに応えて、何でもしゃべるようになり明るくなつたこと。そんなことから二人の親密度が増して來たが、母親には結婚の意志が全く無かつたのに、ある日息子が彼に「僕のお父さんになつて欲しい」と言つたのだそうです。それが嬉しく、今までいいと逡巡する彼女に「駄目だ、家族にならなくては」と言つたとのこと。結婚してみて、彼が子供の時に親が離婚したりして大変な苦労をしてここまで來た話を聞いて、「私なんか何で幸せだったんだろうと気がついたんです」「もう二度と故郷には戻らないと思っていたのに、主人からお墓参りに行こう、お盆に行こうと言われ、素直に来る気になりました」。こうした二人の話を聞きながら、この家を継ぐ者が居なくなつた時、いつかこういう日が来るかもしれないと思つて家中を譜請したことが正しかつたと思いました。「お仏壇の前でこのような話を聞き、両親への最高の供養になつた。今度は子供達も連れて来てくれ。何日でも泊まれるようにしてあるから。風呂場も新しくしたから入ってくれ」と私は何か一つの大きな責任を果したような気分になつていました。子供の頃、お盆というと、どの家でも遠くに居る家族が帰つて来て村中が華やいだものです。今は静かで盆踊りの太鼓も聞こえて来ないけれど、長い間途絶えていた懐かしい時間が、今この家に満ちているのを感じていました。